

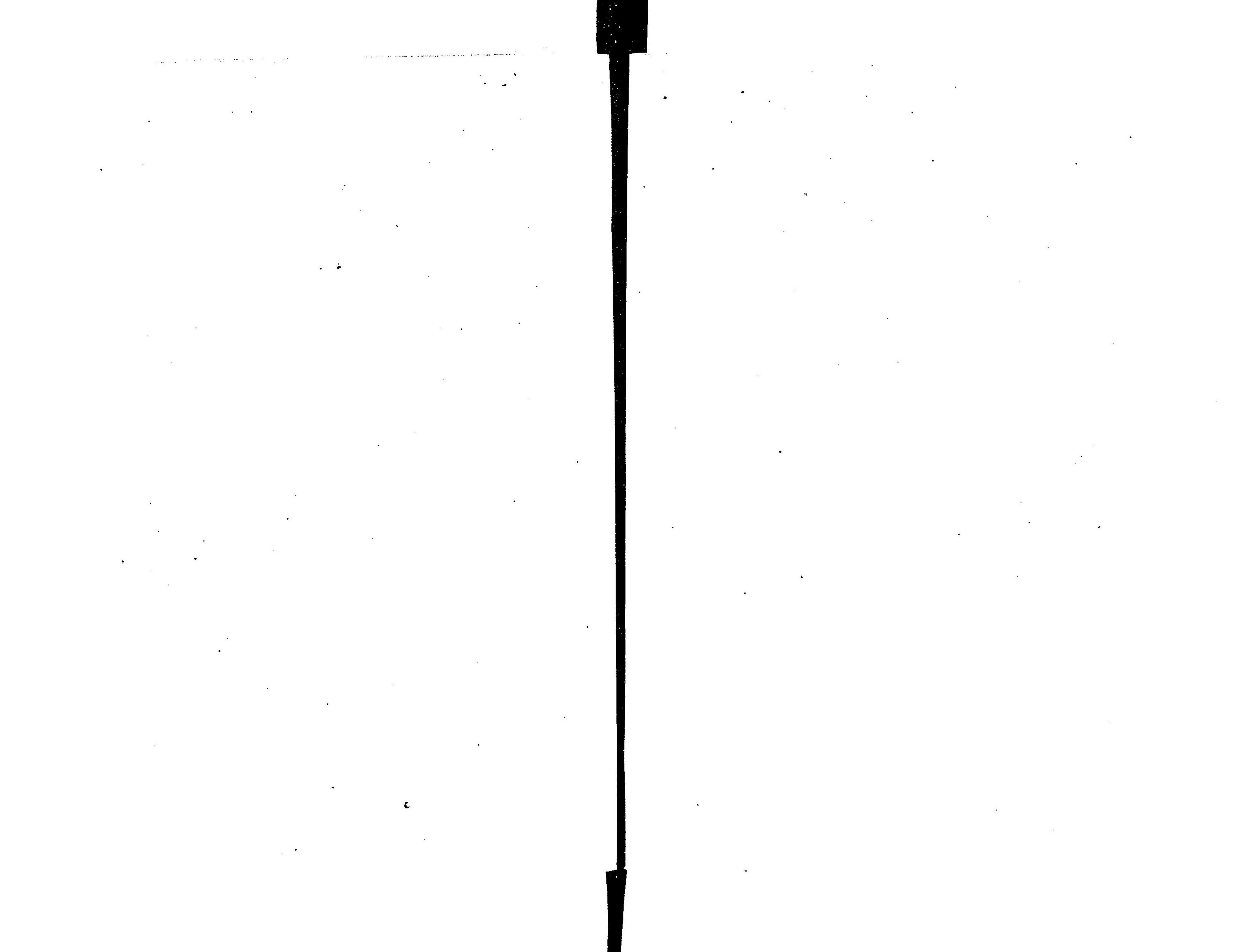
74

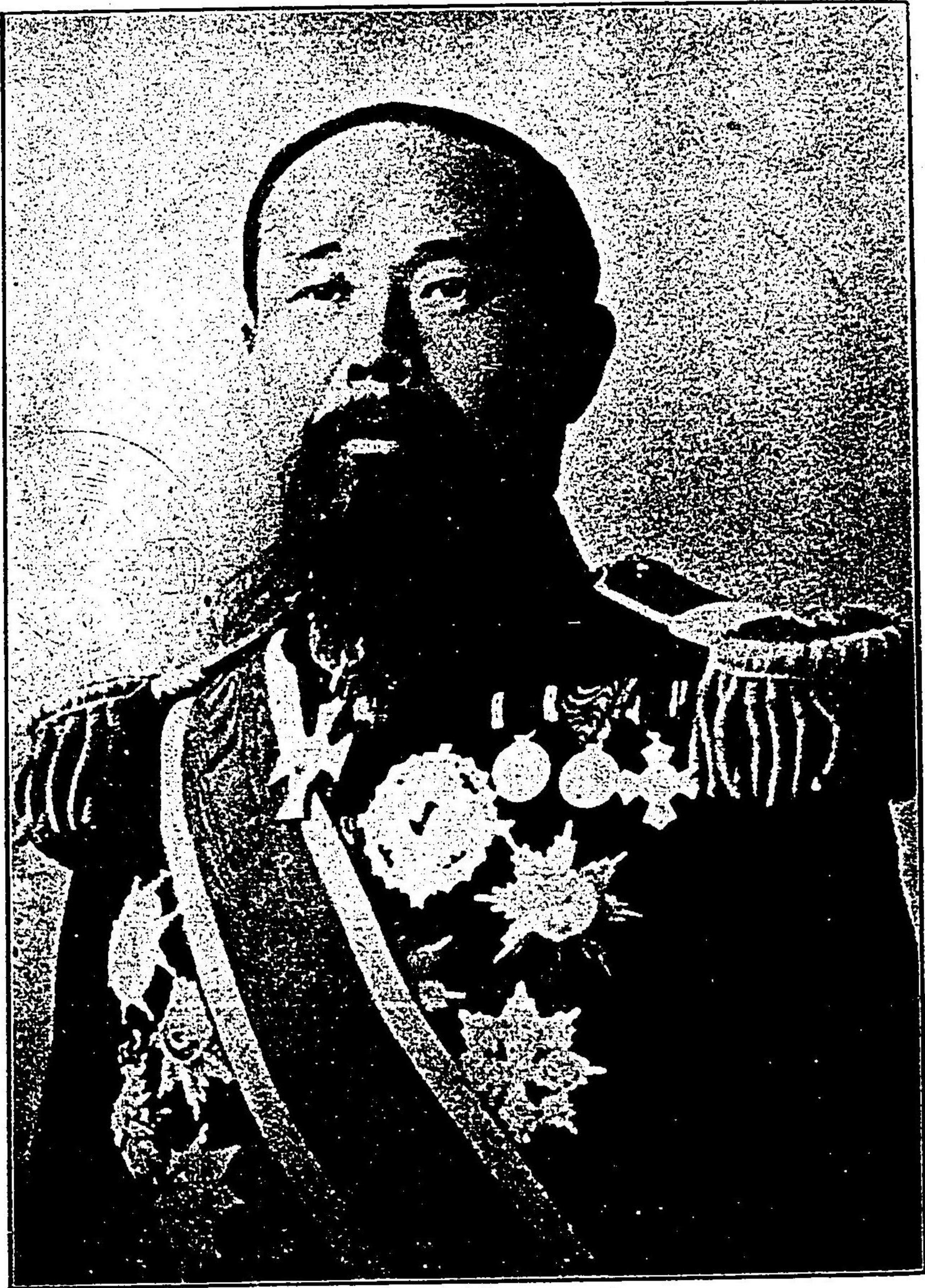
57

竹內紅蓮著

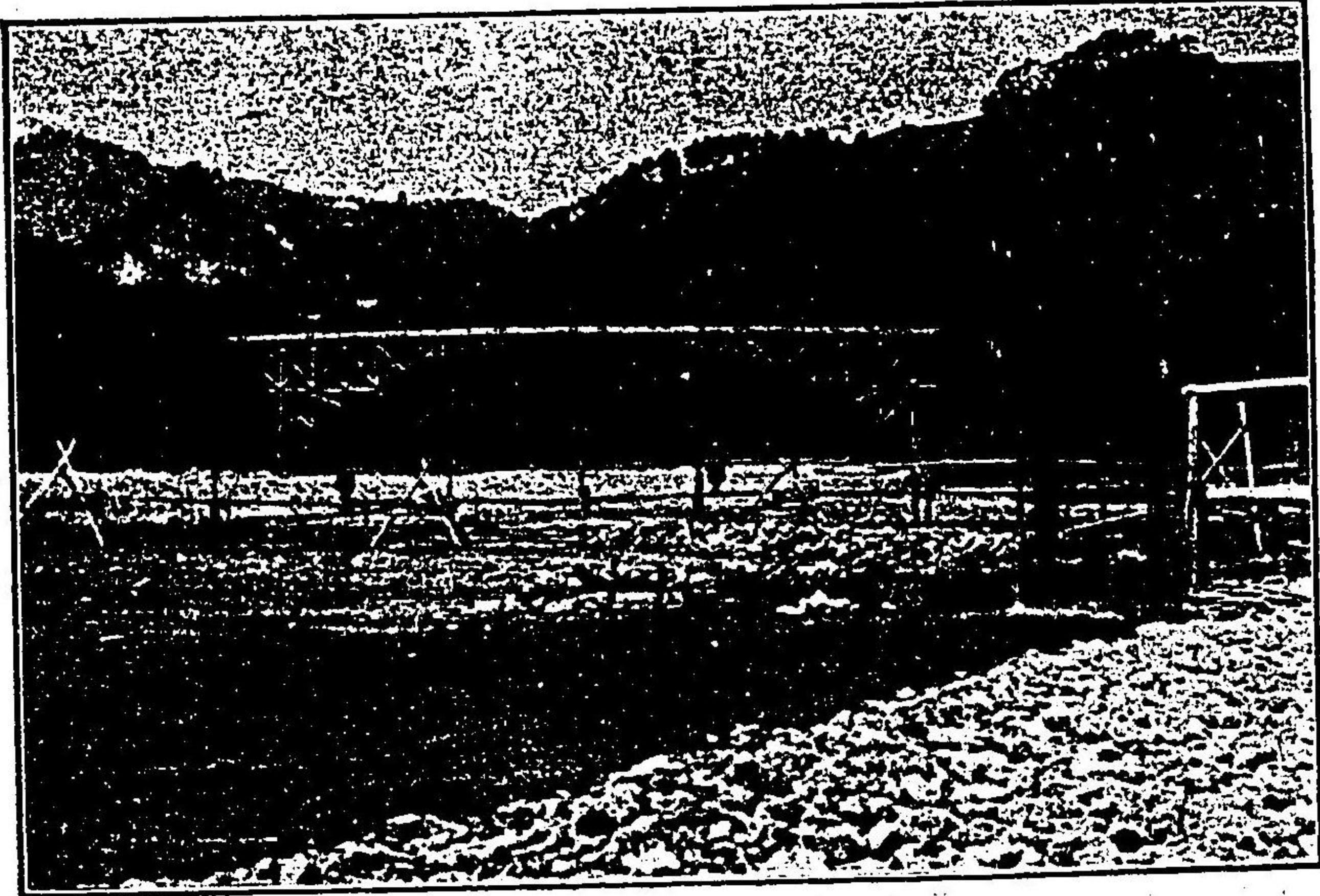
續小哲學

鳴臯書院發行





伊 藤 侯



武藏國青梅万年橋

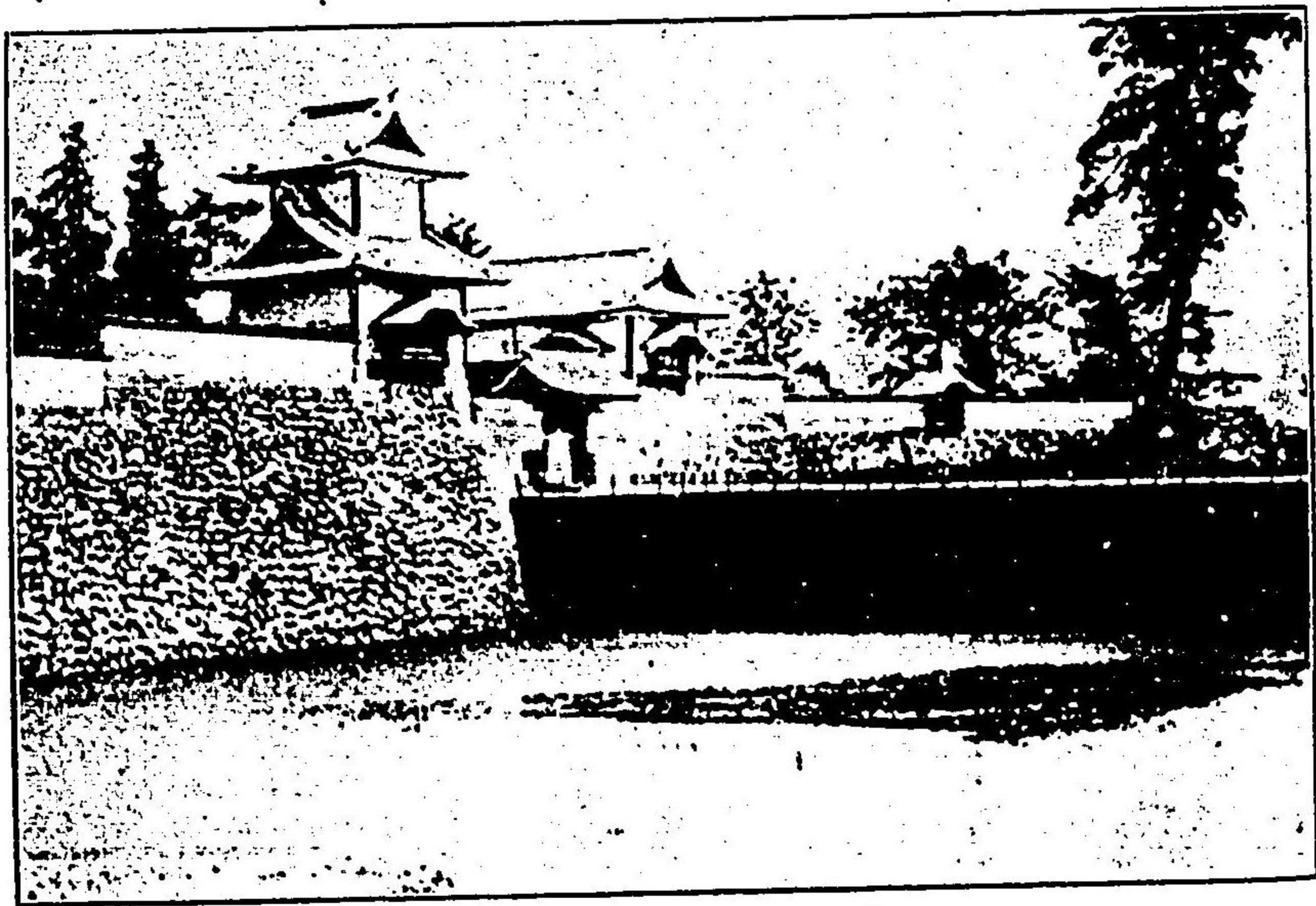


向鳴堀切の菖蒲





松嶋内雄嶋り松嶋市街を望む



加賀國金澤城

築地原田印刷所刊行



Blackfriars Bridge and St. Paul's.

英國 ロンドン、ブラックリアス橋

倫敦の風景
 橋の風景
 聖パウルの大聖堂
 橋の風景
 聖パウルの大聖堂
 橋の風景
 聖パウルの大聖堂



特53

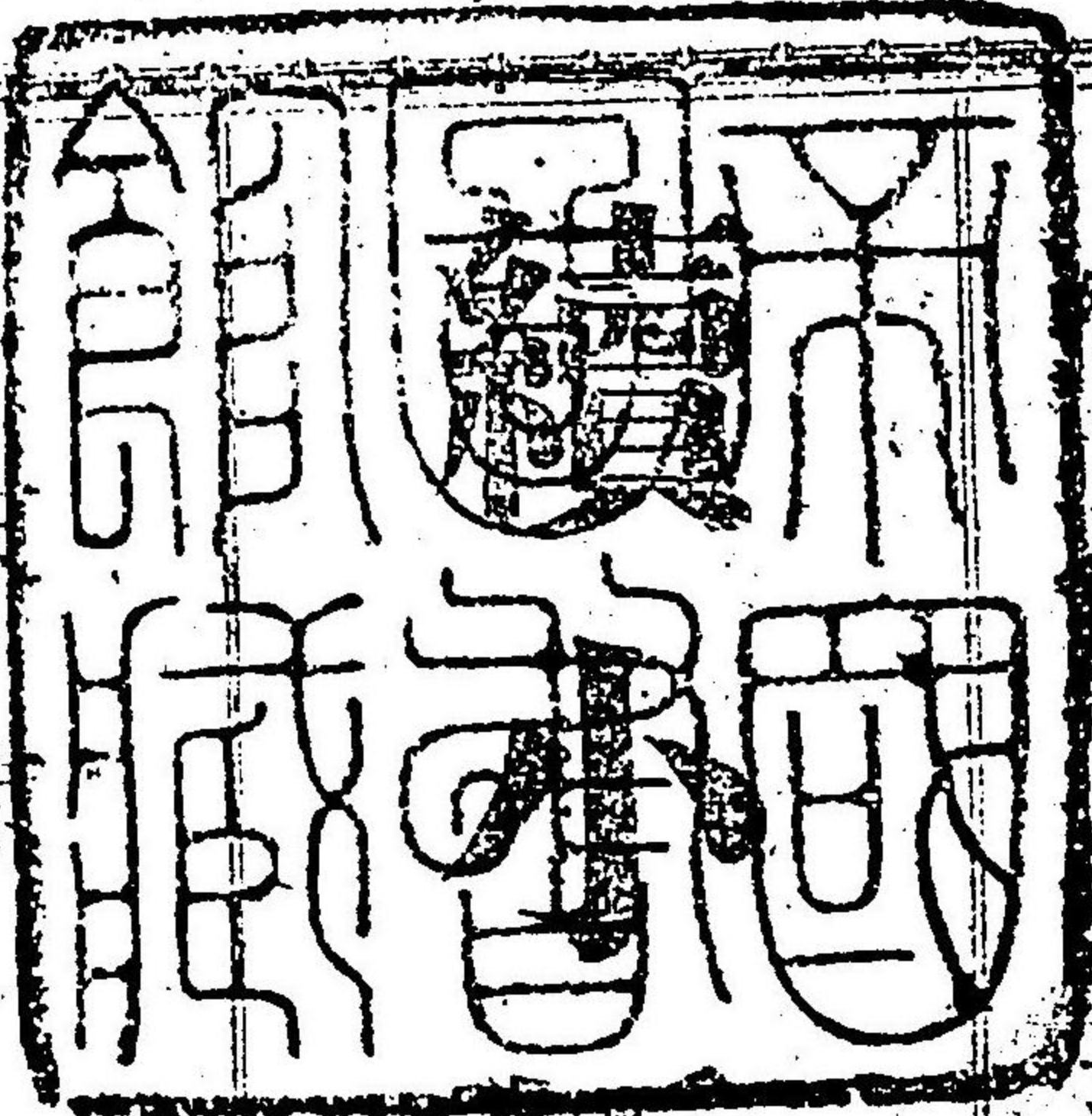
~~特41~~

107

~~131~~

東京

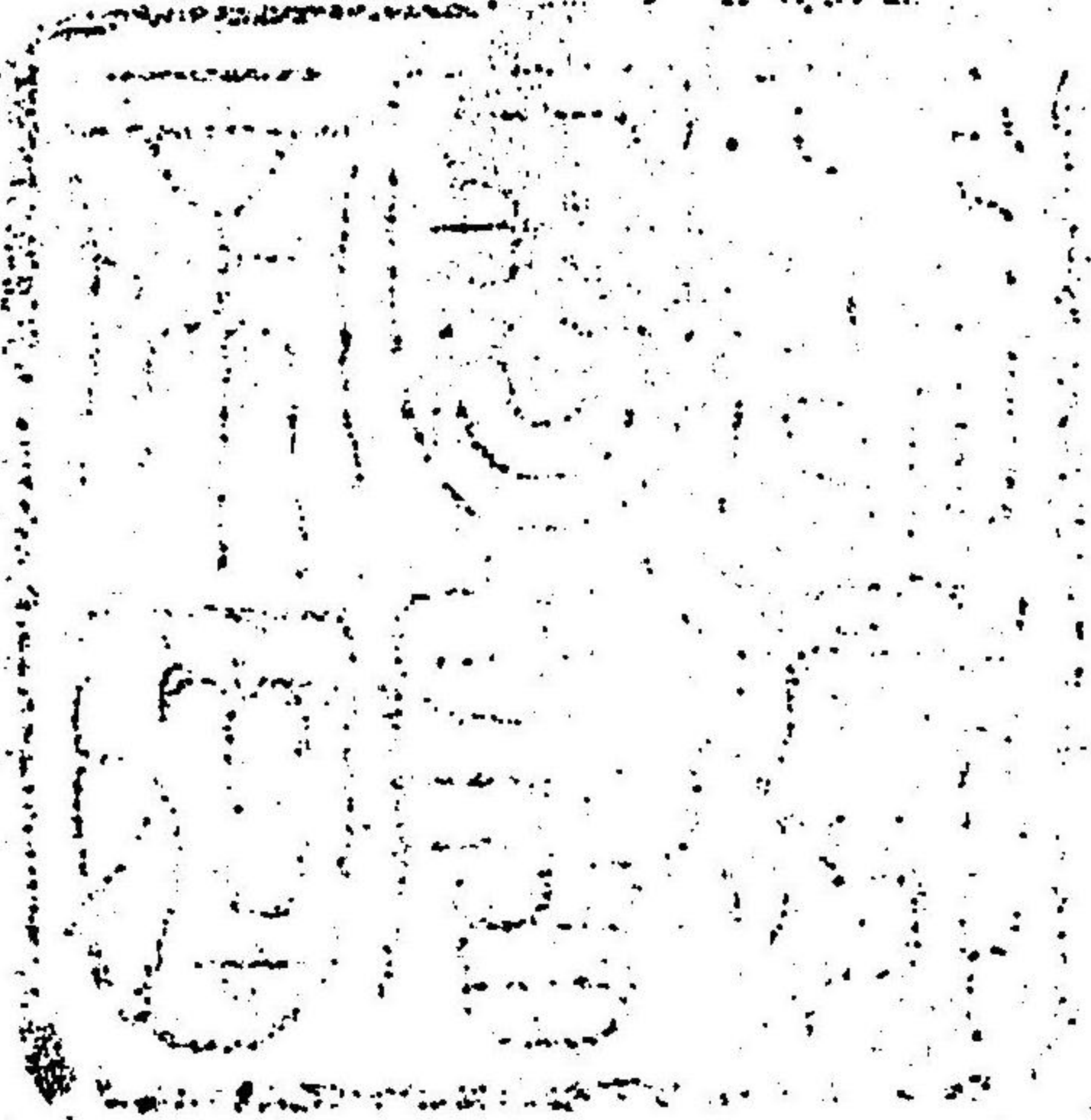
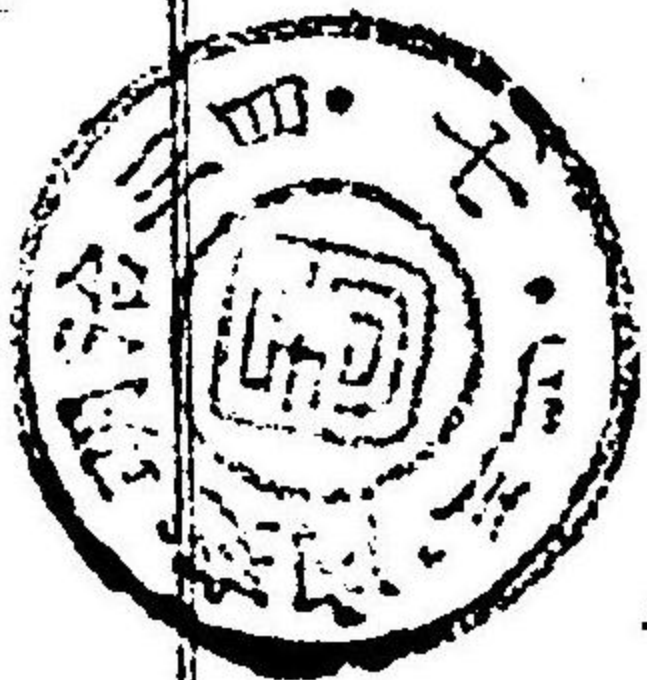
鳴阜書院發兌

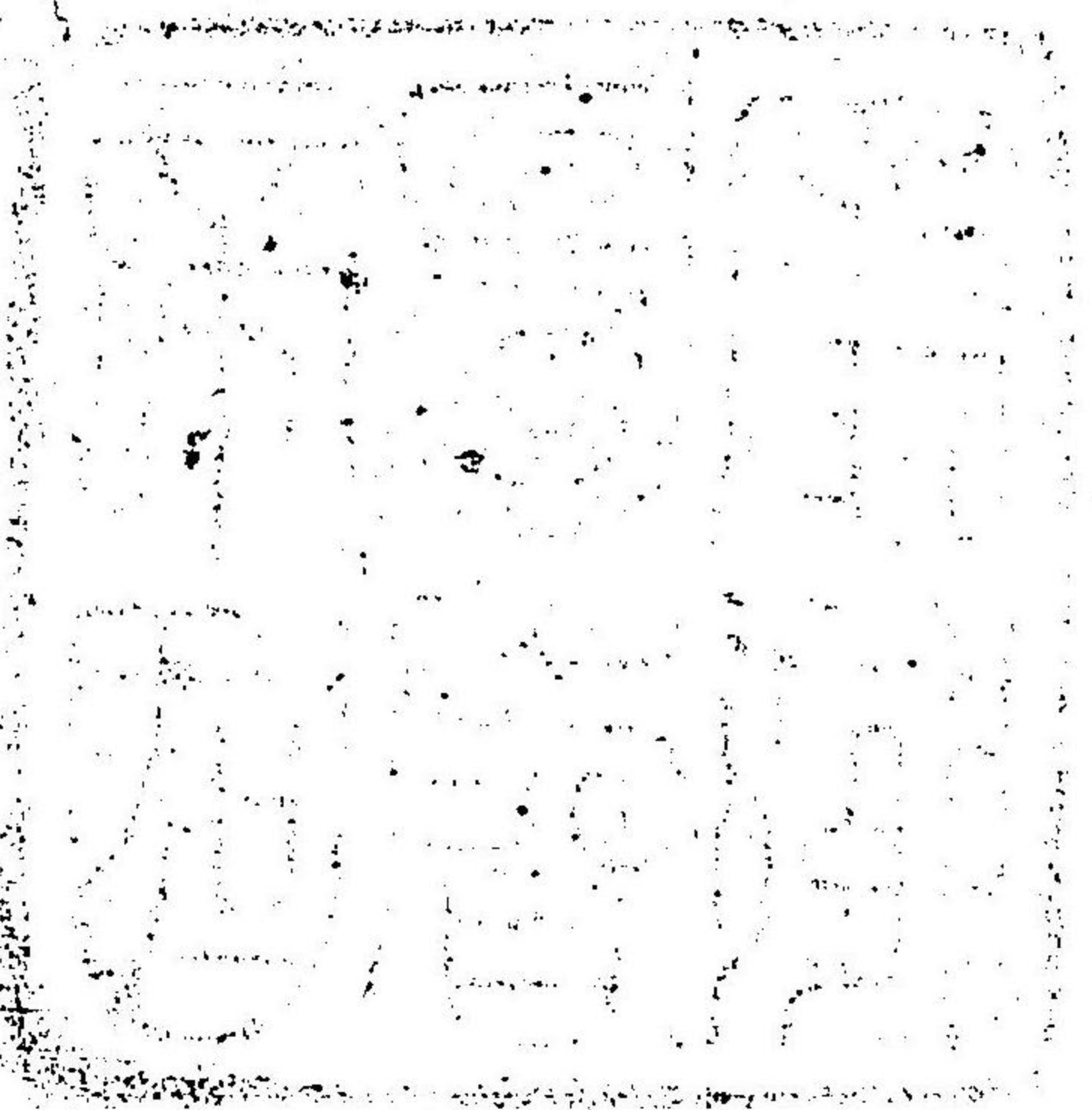


少國民主筆

竹內紅蓮編

哲學一名笑林





はしがき

『續小哲學』こゝになりぬ、こゝに書くべき事
のあらましは既に前編に書きつくしたれ
はまた要なからん、只此所には多くを『少國
民』より取りたる事のみを告げて止まん

鳴阜書院編輯局

明治三十四年四月二十五日
火なき火鉢の傍にて

編者 志 る ず

目次

日よりも月……………一頁
風邪見舞……………二頁
長短……………二頁
無學者の頓悟……………三頁
火は寒い……………三頁
綿密……………四頁
一口話……………四頁
地獄極楽……………五頁
丁稚と僧侶……………六頁
口の大きな人……………七頁
詩作……………八頁
日本は廣い……………九頁

英語寸話……………九頁
鯉の病氣……………十頁
板の間かせぎ……………十一頁
色黒くなる……………十一頁
俄に生長……………十二頁
煙草屋の文字……………十三頁
敵のお話……………十五頁
やしんぼう……………十五頁
字話……………十六頁
癡兒奴……………十七頁
苦になる……………十七頁
小人の身投げ……………十八頁
忘情者……………十八頁
文字のない國……………十九頁

赤かへの賊	二十頁
頂いた積り	二十一頁
測候所	二十二頁
江戸の敵は長崎で討つ	二十三頁
我子自慢	二十三頁
遠慮	二十四頁
大きな歌	二十五頁
頭を買はう	二十六頁
少尉の頓智	二十七頁
うそつき	二十九頁
こじつけ	三十一頁
蚤と風	三十二頁
下駄と靴	三十三頁
一口話(其二)	三十三頁

鼻くらへ	三十四頁
親馬鹿	三十四頁
犬と馬と熊と鹿	三十五頁
一口話(其三)	三十五頁
丁斑魚の御馳走	三十六頁
禁酒	三十七頁
活動寫眞	三十八頁
氣の長い男	三十八頁
小僧の悪智恵	三十九頁
支那の川	四十頁
一口話(其四)	四十頁
盲人の聞き違ひ	四十一頁
地蔵に質問	四十二頁
番頭の歌	四十三頁

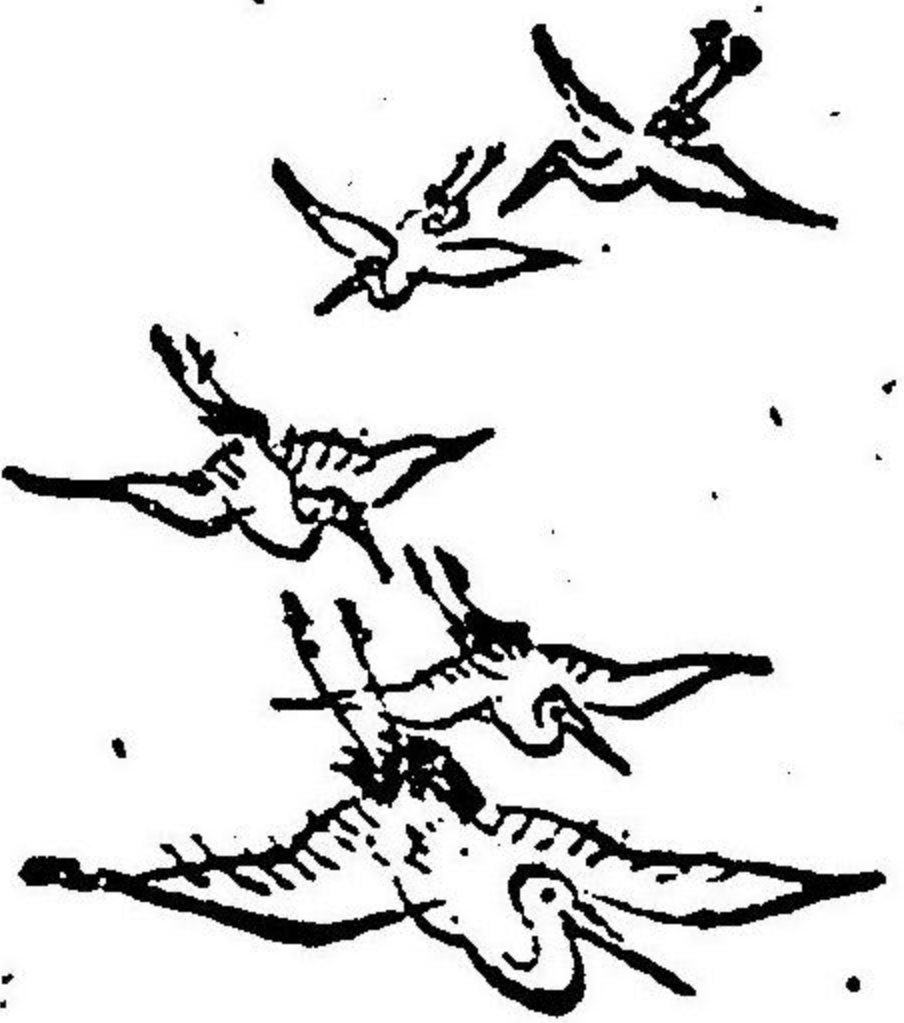
顔といふ字に二通り	四十四頁
吝嗇家	四十四頁
上野公園の察山子	四十五頁
足輕の上京	四十五頁
彌次喜多の經濟學	四十六頁
字話(其二)	四十七頁
親の感心	四十八頁
偽雙	四十九頁
鼻が惜しい	四十九頁
空氣がない	五十一頁
酒の上で争闘	五十一頁
東京府廳	五十二頁
一口話(其五)	五十三頁
賣卜者の失敗	五十三頁

のろ車夫	五十四頁
娘の勇氣	五十四頁

附 録

五厘銅花

紅れん作



樽御輿 紅蓮

幼き者の肩なれて

かくもながしや樽御輿

赤のはちまき 中形の

そろひの浴衣 黄のたすき

袂につけし 鈴の音も

けふ勇ましき 足袋はだし

* * * * *

あつちよりの掛壁に

姉も妹も出て見ん

かゝる姿を亡き母に

一目見せばや汝を愛でし

四年前なる八つまで

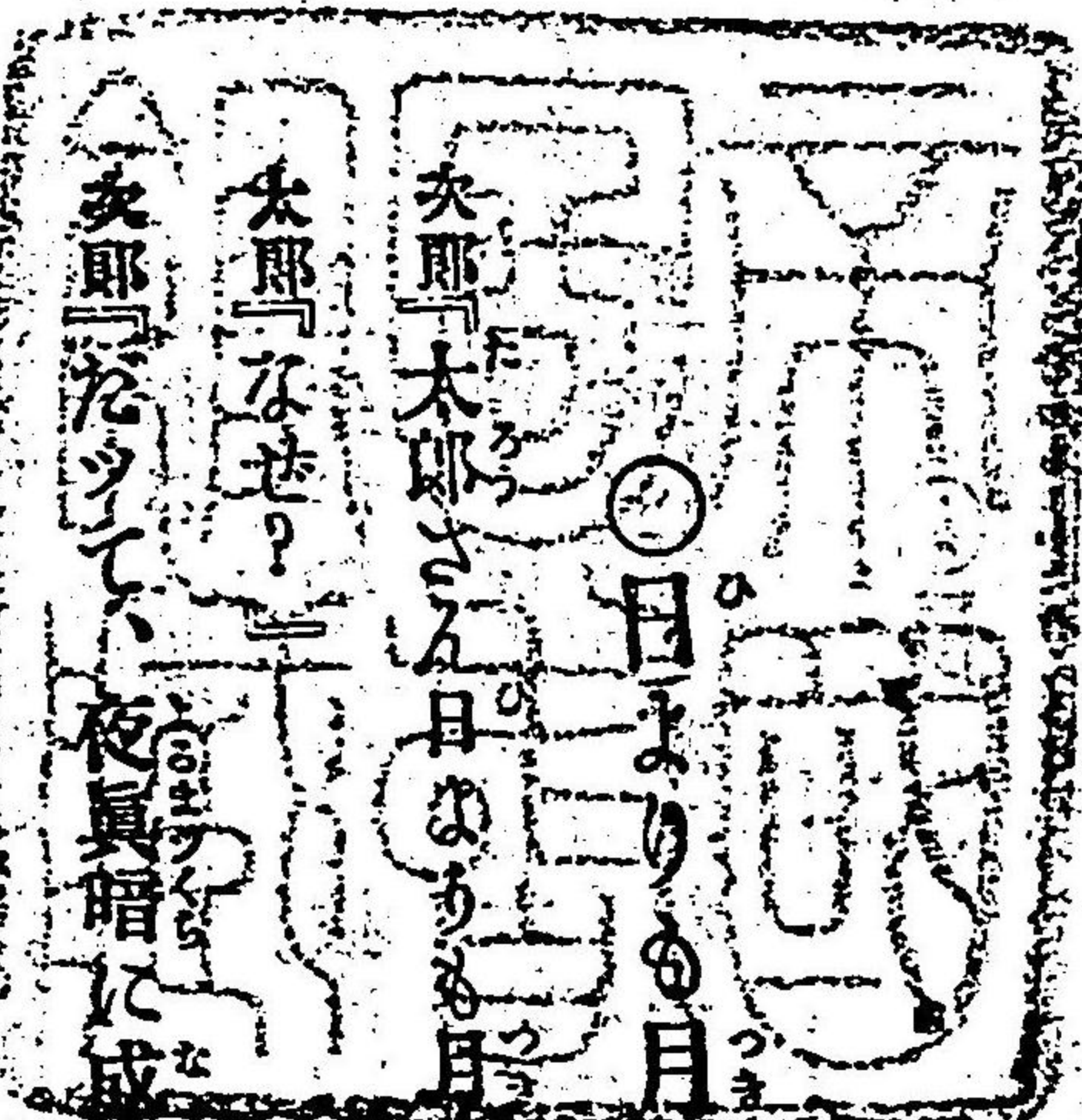
事はつけつゝさにかくに

稚兒なす泣いてしたひたる

母の傍に一目見せばや

續小哲學 一名 笑林

竹内紅蓮編



次郎「太郎さん日よりの月の方が有難いね」

次郎「なぜ？」

次郎「たつて、夜真暗に成つた所で、月が出て人間に明りを貸してく

れるだらう、けれども日などはううでない、明るい晝間出て来て、キラ／＼光つてゐるばかりで、たい遊んでゐるのだもの、月

の方が、いくら善か知れやしなう」

○風邪見舞

熊さんと云ふ者、風を引きて臥し居りし所へ、或日猿といふ男が見舞に行き、熊さんに向ひ言ふ様、

猿「熊さん象だね」

熊「牛がかぶつて猿けがさす」

猿「狒々虎大變な大蛇にしね」

熊「猫に狐こたアねエ馬になほる」

○長短

甲「君は片足短いから歩行に不自由だらう」

乙「なに失敬な！短いもんか、片足長いから、餘計に行き善い」

○無學者の頓智

作兵衛さん、此月は大ですか小ですか一寸見て下さい、と隣の小供が持つて来た曆を見るは見たが、作兵衛先生根が無學だから、少しもわからない、しばらく考へて居て、後曰く、ムーろうだなア、大の様にもあり、小の様にもあり、どちらか、一寸分りかねるけどア、大としとさませう

それはなせですかと尋ねたら、作兵衛先生、ぬからぬ顔して「魚でもお前昔から大は小を兼ねるといふもの」

○火は寒い

弟「兄さん、火は寒いねー」

兄「なぜ？」

弟「でも暖取る時、おっ寒い、と云つてあたるから。」

○綿密

或紳士、翌日の朝五時に起きてくれると、下女に言ひつけて寐ました。翌日になると下女が三時に起しました、紳士腹を立て、

紳士「まだ早いのに」

下女「はい、あと二時間お寐なすつても宜しうござりますと申し上げますのです」

○一口話

◎長松に玉子を買ひにやつたがまだ(雞卵)

旅客「姉さんお酒が濁つてるよ」

女中「どうも清ません」

◎耳のそばへ来て文と鳴く虫は(蚊)

◎此糸は何色だツて無論(紫)

◎田の上にある草は(苗)

○地獄極楽

放湯息子大金を消費たので、父より散々叱咤を頂いて居ますと傍に居た祖母が

祖母「お前うんなに金を消費と地獄へ行くよ」

と申しますと、息子の返事が可笑しい

息子「人の一生懸命に願ふ極樂へ行つたといふ話とへ聞いたことも無いのに、願はない地獄へ行く理がありますから」

○丁稚と僧侶

丁稚渡し舟に乗り、河中に小便を垂れんとす、一僧侶あり同乗し居りしが小僧を叱して曰く

僧侶「河中と雖も神あり小便すべからず」

丁稚「さらば船中にしませう」

僧侶「船中にはなほ更船玉明神といふ神様がござる」

丁稚言ひ込められて、暫時無言で居ましたが不圖立つて、僧侶の頭

から小便を垂れました、僧侶大に怒り

僧侶「こら何をするんだ」

丁稚「船の中にも河の中にも神あれど、貴僧の頭に髪がないぞ」

○口の大きな人

甲「君、擊劍者はどの口の大きい奴はないね」

乙「なぜだ」

甲「でも喧嘩食(劍客)と云ふじやないか」

乙「支那にはもつと強いのがあつたよ」

甲「どうして」

乙「でも彼の論語に、子の玉岩食(子曰)と書いてあるじやないか

甲『しかし日本は支那に負けな、もつと強いのがある』
乙『どうだ』

甲『昔安部仲麿は、三笠の山に出てし月囃も(月かも)といつたじゃ
ないか』

○詩作

下男『旦那様、詩作々と仰しやるのは、何のことでござります』

旦那『うれは詩を作ることじゃ』

下男『どうしてお作りなせします』

旦那『先づ唐詩撰などを種にして作るのじゃ』

下男『肥料は何をなさします』

旦那『……………』

○日本は廣い

信濃の國の山中から出て来た百姓、始めて上野停車場へ着し、停車
場前の廣さをつくつく見て

子『れ父さん日本は廣いね』

父『廣いとも、此外にまで已等の村も日本だから尙更廣い』

○英語寸話

△鯨は獸なれどWhaleこそはありません

△舟がShipの如くに走る

△此所に鰻が居るよ

△あの森には○鳥の檻が生へて居ります

△石がストーンと地に落ちました

○鯉の病氣

床の間の掛物に見事な鯉を一匹書いてあります

甲『この鯉はほんとうに生てるよ』

乙『馬鹿生きてるもんか死んでるよ』

生きてる死んでると、甲乙二人の下男がね掃除を止めて口論して居りますと、そこへ主人がまゐりましたすると尋ねました

甲乙『旦那様、此掛物の鯉が死んで居ませうか、生きて居ませうか』

旦那『さうだな、死んでも居ないし、生きても居ない』

甲乙『エッ!! どうしてござります』

旦那『さア病氣で床に附いてるわ』

○板の間かせぎ

湯屋にて、甘く他人の衣服を着替へて行かうとしますと

主人『もしく着物が違ひます』

客『あアううか、どうやら袴が短いと思つた』

主人『なに手が長いんだ』

○色黒くなる

明日から一ヶ月間暑中休暇じやといふ日、先生は皆の生徒を集めて言ひました『諸君は長い休暇の間を家にばかり居ないで、山野を跋渉し湖海に遊泳して、日に焼けて眞黒に成つて来なければなりません』と申しましたが、暑中休暇も過ぎて、皆の生徒が再び學校へ集つてまゐりますと、中に一人次郎さんばかりは顔面中墨をぬつてまゐりました

先生『次郎さんは、なぜ顔に墨を塗つたのですか』

次郎『でも先日先生が眞黒になつて来いとれつしやつたですもの』

○俄に生長

身長低き人あり、身丈の高くなるよをにと、仁玉様へ願掛致しました

た、七日目の夜です夢に、仁玉様枕元へお立ちに成つて『汝の願はゆるしてやる伸びて見よ』と云はれました故矮人手足を伸ばせした、手足が布團の外へ出ました、すると大變に喜びまして起きて見ると、夏の事ですからどう寐返りましたか三幅の布團を横に着て居ました

○煙草屋の文字

甲『今度文部省で假名遣ひを一定したううだね』

乙『あ、ううだね』と云ふと『けい』とか語尾を長く引くときには、下へ棒を引いとくんだね、手数が、かゝらなくて妙だね』

甲「あまり妙でもないよ、已れに云はせると確に文部省の失策だ」

乙「なせ？」

甲「たつて君、新聞紙などは即日から、それを用ゐるかと思ふたに

現今日本にある幾千の新聞雑誌一つたつて元の通でやつて居

ないのはありやしな」

など、二人の番頭が話し合つて居ますと、小僧横合より

小僧「もし、番頭さん、うんな棒を引いたのがはんどうの字です

か？」

番頭「あ、そうだ、今度うれに確定たのだからうだ」

小僧「オヤ、私はまた「ヒロ」とか「コーイン」とかよく新聞に廣

告してありますから、あれは煙草屋の字だと思つてました」

○數のお話

越後の新潟の、酒屋の、四右衛門は、五月の六日に、尻べた焼して
薬呑んで十日寐たうです

○やもんぼう

賤坊(物を食べたがる人)に向ふて曰く、

甲「君は禪の川流れだね」

乙「なせ僕は川流れの禪ですか」

甲「でも杭に(食ひに)掛るともう離れないもの」

○字話

△一つしかなくて大きい物は

△車は専ら

△枯れるといけないから木は直に

△十一歳でも

△馬を敬へば人は

△手で易く

△言を己一人にて

△由に廣く金があるから

△水を益々入るれば遂に

天

轉る

植る

士だよ

驚く

揚る

記す

鑛山

溢る

○棄兒奴

甲「彼所に棄兒奴が在つたよ」

乙「や、此米の高いのに捨米を見つけたとは結構なことじゃ」

甲「うの米ではない赤兒奴だよ」

乙「なに赤米では洗へば善いじやないか」

甲「まだ分らぬいか、人ですよ」

乙「結構々々、四斗なら二斗づゝ分やう」

○苦になる

或所に發句會ありて題は「借金」と出でたり、甲兵衛、先つ作りて曰く「借金をたんと借りれば法つかぬ」と乙兵衛、傍に在りて曰く、

『甲兵衛君の作りたるは句にならず』と、甲兵衛曰く『うれでも僕は善に成つてくちならぬのだと』

○小人の身あげ

極めて小さき人あり、或人之を大に罵る、小人大に怒りて曰く、『それは衆中で大恥をかゝせられたから生きては居られぬ、誰ぞ茶碗に水を一盃下され』と云ふに、何にすると尋ねれば『無論、身を投げて死ぬんだ』

○怠惰者

大の怠惰者のあり、臥たまふ二三日も起きないから、母親は心配して、

これ牛松や、めしだけは喰べないか』と呼び起せども、返辭をするが面倒なりと黙つて居ると、母親はいよゝゝ心配して、もし餓死でもすると大變なりと、欺し賺して色々に喰はせんとすれば

子『でもれいら喰ふのが面倒さ………』

母『此白痴め喰はないと死んで仕舞ふぞ』

子『れいら生きてるのも面倒な哩』

○文字の無い國

弟『兄さんゝ文字のない國でも郵便があるかね』

兄『ありますとも』

弟『はがきなんか、どうして書くんです』

兄「文字のない國で或人が招待状を出した、其招待のはかきには
 棒を四本引いてあります、すると其返事が来た、これは葉書の
 裏一面に眞黒に成つて居ました。どうです葉書は其葉書が分り
 ますか、文字のある國に居ても八張分らないのでせう。これ
 はね始めの『よぼう』とらふのさ、返事はね『多忙にて隙間
 なくて参られません』とらふのさ」

○赤壁の賊

盜賊或夜漢學者の家へ忍び入り寐靜まるをまちて仕事せんと思ひ襖
 の壁の前にかくれて居たり、時に坐敷の方に讀書して居る人あり、
 高らかに曰く、『前の赤かべの賊』と(前赤壁の賦) 盜人見付けられた

かど出て行く様して壁の後にかくれたり、間もなく坐敷の方にて再
 び『後のあか壁の賊』と(後赤壁の賦)いへり、茲に於てか盜人大に驚
 き捕へられては大變と狐鼠々々逃げ行きたり、
 翌日漢學者先生起き出て見るに戸を放して賊の入りたるあどあれど
 別に紛失した物もないので『なるほど、これは漢學の神様が守護して
 下さるからだ』と感心しました

○頂いた積り

妹『あら美しい指輪ですことー』
 兄『どうです美しいんでせう……妹君』
 妹『はんとらに美しいのね、私に頂戴！』

兄「妹君には善過ぎるから」

妹「善過ぎるから尙ほ更善いんですよ、よう、私に下さいな!!」

兄「では進上た心算にしにきませう!!!」

妹「では頂いた心算にしにきませう!!!」

○測候所

少しばかり文字の讀める男、ある時、那覇測候所の前を通り其門札を見て、すました顔付に微笑を堪えて曰く「オヤ、譯のわからん事を書いて居やがるなナハ、ハカリ、サフラフ、トコロ、どうも合點が行かんわい」

○江戸の敵は長崎で討つ

一人の酔漢橋の中央まで来て、ゲロ〜と嘔吐をやりました、所が折りあしく、橋の下を一艘の肥船が通り行くので、船頭の頭へ嘔吐が掛りました、すると船頭大に立腹して、やがて岸へ上り只今糞を取つたばかりの長柄で酔漢を散々打ちました、折りから仲裁人が来て曰く、酔ふてる人も悪いが、船頭さんも長柄で打つとはひどい、船頭平氣なかほにて

『なに昔から嘔吐の敵は長柄で討つと云ふから』

○我子自慢

大層己の子を自慢する親が三人集りし所

「甲親」われの息子は今年十五歳なれども十七文字の發句といふものを習ふて居る」

乙親「なんだ十七文字位、わしん所の息子は三十一文字の和歌といふものを稽古して居る」

丙親「は、………どなたも下らない事を………私の息子は千字文を習つて居ますよ」

○遠慮

父「坊や、れ前は學校では、いつも下の席に居るが、チト上の方へ出なくてははいけませんよ」

子「だつてれ父さん、先生が常々れつしやるには、人は遠慮は大切だつて」

○大きな歌

同窓の友三人集りて、和歌の會を催せり、時に甲は、我は今頗る大なる歌を一首考へ出せり、恐らく兩君の内、之に及ぶ大なる歌は作られまいと、先づ高慢の色を鼻の先に現はして、得々然として謡すらく。

須彌山に腰打ちかけて大空を

笠にすれども耳はかくれず

乙曰く、甲君の歌未だ以て大とするに足らず、先づ我歌拜聴したまへ

天は面日月まなこ風は呼吸

海山かけて我身なりけり

と左右を顧て感心したるといはぬばかりなり此時丙靜に歌ふて曰く

ひつくるめ天地をぐつと呑む時に

少しも喉にさはらざりけり

甲乙爲に嗟然たり

○頭を買はる

或人禿老人に向ひて曰く、

或れ前の頭を顔(買はる)かと思つたよ

老人目に角を立て、

老「人を馬鹿にし給ふを、頭などを誰か賣るもんか」

○少尉の頓智

今少尉が一小隊の兵士を率ゐて射的場へ來たのです、ろして兼て説

明された要領に従て發砲するけれども、どうした譯か、見る／＼五

六人はねらひが外れた

少尉はもどかしいといふ顔付で

『僕のやるのを見て居れ』

とねらひを定めてドンと放しました、所が百發百中と思ひの外的に

はあたらなかつた、居並ぶ兵士は互に顔を見合せて、腹の中ではク

ス／＼笑つてゐるのです、少尉は大音あげて

『二番の前列の姿勢は丁度今の様だつただから當らない』
少尉は再び火ぶたを切つたのです、而し亦當らなかつた、少尉は一層高聲で

『五番の打ち方はあんな風だから、當る理由がない』
三度目には首尾よく當つたのです、少尉はニッコリ笑つて
『これこそ僕の打ち方じや』

早言葉(一息に言ふてこらし)

○向ひの小山の小寺の小僧は小棚の小鉢の小味噌を小両もて小なめて小頭小きん
小小もがれた

○何所じやの池には数年大蛇が住むところじやが其蛇が雄蛇が雌蛇が何んじやの、
かんじやの、わかんじや

○うそつき

千三つの久助といふ左官、虚言ばかり言つて居て千の中で三のしか
眞實を言はぬいから、うれでるんな綽名なんです

此千三つ先生或朝隣村の華主場へ仕事に往つた、ね早ふつてあ
さつする直ぐ、大息をついて

千『どうも人は見かけによらぬ者で私の村で今朝意外な事が出来
ました』

千『ウム、うれはとうした』
千『イヤ外でもありませんが村で一番といふ極々堅い男が、今朝縛
られて行きました、常は評判の堅造でも、何か悪い事を致しま

もたと見えます。どうも人は見かけによらぬもので』

『さうア大變だ、縛られたといふのは誰だ』

『それがサ通常の人ではなくて坊さんです』

『サニ坊様じやッて、それでは養生寺様か？あのお方がどうし

て』

『あのれ方でございませせん外の坊様です』

『外に坊様はない様だか誰だ、早く聞かざるいか』

主人の充分焦燥て来た顔を見て、フツと吹き出した

『王村はづれの辻に立てござる、石のれ地藏様が荒縄で縛られて居

ます』

主人は腹が立つやら「笑しいやらで、亦一杯喰はされたと笑つてし

まつた、尤も此石地藏は腫物を喰す靈験があるつて、迷信者は荒縄

で地藏様を縛つて、なほして下されば解いてあげますと願を掛るの

です

○こじつめ

○母さんが私を呼ぶからEと返事をする

○池に蛙がPop飛び込んだ

○鯉の麩を喰ふ音がGarp Garp

○蝙蝠が穴からB.M.飛び出した

○此度少國民のHogは蛙の圖だ

○弓がさしからBOMに糸をつひよう

- 主人が留守だつて、イヤ居りMaster
- 障子をShut閉した
- 杖をCane(劍)の代用とす
- 狩人がHorn(鹿)を打つ
- 君其鶴を僕にC.H.A.H.Aが
- 其卵はEggつあるんです

○蚤と虱

或書生煙草を買ひに行きし所

書「オイ番頭さんね前の襟に虱が居るではないか」

番「イエ虱などは上げませぬ、すつと蚤の(飲みの)善い所を差上げ

まする」

○下駄と靴

下駄と靴と、或時一諸に旅行しました、途中種々な面白い話をし
てまゐりますと、下駄はゲタ〜と笑ふし、靴はタツ〜と笑ふの
です

○一口話 (其二)

- 暑いから之をれ使ひよ「はい扇に(大きに)有がたう様」
- 番頭さん、此瀬戸物には瑕がおりませんかへ、「はア徳利御覽下
れ」

○熱海の温泉も湯治(當時)は繁昌するぞ

○チヨイト一杯やつて見だが、酒々(サテ〜)結構だわい』

○金銭を湯水の様に使ふと『ろりやたまらない』

○鼻くらべ

甲『オイ乙君、天狗とれ多福とどちらの鼻が高らね』

乙『云はずとも天狗が高い』

甲『けれども、れ多福の頬(方)が高じやないか』

○親馬鹿

弟『兄さん、燈心といふ物は山吹の心から取るんだつてぬ』

兄『イヤろうでない、疊の目から抜くのたろう』

父『二人共學校へ行き乍らうんな事を知らまいか、あれはな、燈心

は行燈の引だしから出るものじや』

○犬と馬と熊と鹿と

甲『君々！、君の家へ今ね、犬が這入つて馬糞たれて行つたよ』

乙『ナンダくだらない、君が見て居たのなら打殺して、熊の胃で

取つたら、錢にならうものを』

甲『イヤ、あれは鹿じやないよ』

○一口話(其三)

○私の娘を貴方へ嫁に取つて下さい『イエ家内増せん』

○避暑かた／＼、湯治に伊香保か(行かうか)、ハチ道後(何所)が善
かろう

○うんな下手碁に身を入れては、外の用事は出来ぬじやないか『
イ圍碁(以後)は慎みます

○丁斑魚の御馳走

番頭ねごどのまねして

『我等はひどいものだ、此家に六年奉公するが、ね魚で食事をし
た事が、未だ一度もあらず』

旦那獨言の様に

『去年の冬、番頭が眼を病た時、丁斑魚を三疋御馳走してやつた
ッけナ』

○禁酒

日本一の大酒呑を親子親類相談の上、向ふ三ヶ年禁酒することに定
めた、しかし是迄毎日／＼三升位はね定りであつたのだから、俄に
止めて病氣でも起したらいけないと、内々承知の上で嫁の手から一
日五勺つゝの酒呑む事を許しました、三四日過ますと此男嫁に向つ
て言ふ様、三年の禁酒を六年にするから五勺の酒を毎日一合つゝ飲
む事にしてくれと申します、嫁は少しこまりましたが理由がそれで
すから仕方がないといふ風で内々で毎日一合つゝやりました、亦二

三日過ぎますと、此度は十二年禁酒するから毎日二合つゝにしてくれと申しました

○活動寫眞

田舎者活動寫眞の戦争を見て飛丸雨の如きに至り大に驚き連を顧みて曰く

「銃丸がられると危いから早く歸らう」

○氣の長い男

甲「世の中に、氣の長い男もあればあつたもんじや、岸に人の釣りして居るのを一時間も立つて見て居るんだもの」

乙「君はどうしてうんな事を知つてるのだ」

甲「僕は見えて居たからさ」

乙「それでは其男と、君とどちらが氣が長い？」

○小僧の惡智恵

和尚が二人して砂糖をなめて居て、外へ行く時、小僧に向つて言ふ様

「此白い物は毒だから決して手を觸れてはなりません」

小僧はどうから砂糖じやといふことを知つて居りましたから、留守にあるとすぐ、白砂糖を皆なめ盡しまして、うして和尚の大事な鉢植の花を一枝折つて泣くまねをして居ります、和尚歸り來りて

和『小僧何を泣いてる』

小『和尚さま勘辨して下さいませ、御大切の花を折りまして、申譯もなし、一層の事死さうと思ひまして、毒じやと聞いた白い物を皆なめられたれとまた死に切れませぬ』

○支那の川

甲『北陸道第一の大川は、日本の物でないつてぬ』

乙『おせですか』

甲『でも支那の川（信濃川）と申しますから』

○一口話（其四）

○君、尾張の國には大社がないね『いや〜熱田（有つた）よ』

○君、どこへ釣りに行くの。彼の川へさ。釣れ（連れ）あいだろ。

なせり。だつて一人なもの

○オイ花屋、其蘭は腐つとるね『これは旦那様若蘭ことをおつしやいます』

○これ先程云ひ付けて置いた煙草盆を掃除したか『灰吹（ハイ拭き）ました』

○盲人の聞き違ひ

一人の盲人橋上に来る、時に向ふより、魚賣り大聲にて『真蝶々々!!』と、ふれ来る、盲人已の事と思ひ、右に曲りて歩みしに、河の中

へ眞倒様にジャンプと落ちました

似たものは役者、薬師屋、海軍に記者、

醫者に石屋に夫婦なりけり、

○地藏の質問

近眼の男、道傍の地藏の前に來り

近『もし一寸御尋ね致します、あの此次の宿までまた何里はどある
のですか』

地『……………』

近『あーもし〜!! 次の宿場まで何里ですか!!!』

地『……………』

近『オイ!! くら〜!!!』

地『……………』

近眼先生腹の中では、こいつ雙に相違ない、人に散々物を言せて、
黙つて居やがると怒るとき地藏の傍から鳥が一羽飛んで行くを見て
近『こん野郎返事をしさいから、笠の飛んだのも教へてやらない』

○番頭の歌

主人貧乏なりければ番頭に命じて俵にて屋根を葺かせたり、次の年、
雨の洩る所だけ、亦新に俵を葺きたり、去年のは黒く今年の白く入
り交りたるを、主人つくづく見て

『我が屋根は鷲と鳥が糞をくみて』

番頭すくもどをつけて

『白すり子もめり(俵)黒すり子もめり』

○顔といふ字に二通り

甲「顔といふ字に二通りあるね」

乙「どうして」

甲「老人の顔といふ字は『衰』と書くんだったつて」

乙「おせ」

甲「老人は目が見えなくて齒(ハ)がないから」

○吝 嗇 家

林太郎、己が家に結婚式を擧げる時、小僧をして隣家の、林次郎へ膳と椀とを借りにやりました、隣では用事があるから貸されないと、言つてよこしました、林太郎大に怒り

『彼奴何ぞ吝嗇なるの甚しき、然らば土藏より出して使へ』

○上野公園の案山子

田舎者、上野の公園にて、西郷隆盛の銅像を見、嘆じて曰く

『東京の人は贅澤じやなア、大きな案山子を銅で造てる』

将棋にまけて大はだ抜きや薬くひ

水屋樓

○足輕の上京

昔一人の足輕が江戸へ行く途中、或町にて宿屋の下女あやまつて足輕の裾に水掛たり、足輕大に怒る時、通り合せたる旅人、仲裁す、下女の名を問へは『れかる』といふ、旅人即座に

いでぬる、來かゝる裾に水かゝる

足がる怒るれかるわがる

足がる感心して勘忍してくれました

○彌次喜多の經濟學

彌「時に喜多さん、己の忤も又弟の娘も、學校を卒業したまふ遊んで居る、あれは何をさせたら善からう」

喜「それは經濟學を學ばせ行商人にして九州地方へ遣るが善うで

さんせう」

彌「それはどうして」

喜「大學といふ本にこう書いてあります。濟學の道は姪と子を商人にするにあり、旅を新にするにあり、肥前に止まるにあり」

○字話 (其二)

山の石は

土の黒いのは

人の傍に犬か

舌にて物を言ふは

艸の化したのは

岩

墨 伏して居る

活

花

四十七

日と月と並べば

人二人木に乗りて

手を合せて物を

革のれ化は

四十八

明きり

来る

拾ふ

靴

○親の感心

或遊學生の親、たましく上京して其子の下宿に立ち寄れば、其室内には色々な物を取りちらしてあり。

「まア此兒は幾つだと思ふて居るのならう、着物は脱つ放してたよみもせず、袴は丸めて押込んで置き、此春買つてやつた帽子もこんな汚してしまつた。」

と小言たらしく本箱の蓋を取て見て、

「でも感心な事には本だけは折り目も付けずにあるわら。」

○偽響

或男徴兵検査の時、検査官に向つて、私は響ですから、兵役は止めにして下されと、言ひます、折りから検査官ブーと一聲屁を放ちました、此男知らぬ顔して

「今貴郎か放たれました屁さへ聞えぬ私の耳ですから。」

○鼻が惜しい

隠居共二人よて、酒を飲んで居りました、甲の隠居は兀頭にて髪少

しよりありませんでした、又乙の隠居は鼻がないものでござい
た、乙の隠居酔に乗じて歌を作りました

乙「元頭前に鳥居は奇けれども

後に神(髪)は少しまします

甲の隠居敵討ちの歌をよみました

甲「山々に名所古跡は多けれど

花(鼻)のないはさびしかりけり

乙の隠居大に怒り、家に歸りて此事を妻に話しますと、これは口惜
しいと申しました、乙の隠居は、こうこぼしました

『それは口より鼻がねし』

○空氣がない

次郎「太郎さん、菓子箱に菓子が一つもないよ」

太郎「無い事があるもんですか」

次郎「だつて何もないんですもの」

太郎「屹度なにもありませんか？」

次郎「はい何もありません！」

太郎「菓子がなくても空氣が一杯あるでせう」

次郎「菓子が無いから従て食氣(空氣)もありません」

○酒の上で争鬭

甲「僕は昨日手品を見て来た、手品師はね、火の上を渡つたり、水

を頭から掛けても少しも着物が濡れないのですもの』
『手品師より僕の親爺がえらい、先日酒の上で争闘して、相手の男を二間ばかり取つて投げたといふもの』

大 油桶の鼠をねらふ近眼猫

猫でない狸様に竹を齧いて置き

○東京府廳

東京見物をする時、案内者、一日田舎者を案内して、東京府廳の前に至り、ハタと其名を忘れたり、通りかゝりの人に聞けば『府廳なりといふ、時に田舎者』

『ははア符牒だものわからぬ筈だ』

○一口話 (其五)

客『鳥屋さん、先日買った鶯は少しも鳴かないが、どうしたもんでせう』

鳥屋『ではすぐ鳥かへさせませう』

○關羽は肉食だつたつてね『其筈さ蜀(食)の大將ですもの』

○連戦連勝はね『我國の強い將校だね』

○月がいゝから即席一句出来た、これは苦も(雲)

○賣卜者の失敗

小供賣卜者の家に至り其障子を破る、賣卜先生大に怒り

「誰だ〜、障子を破つたのは誰だ」

小「それだよ、れ前は賣卜者だか、わからなかつたから」

○のろ車夫

車夫「旦那、少しまして下さい」

旦那「馬鹿めのろ〜歩いて来たくせに」

車夫「なつて時間が澤山掛つてますもの」

○娘の勇氣

父親其娘をかへりみて

父「これお花や、れ前は花も生ける、れ茶も出来るし裁縫の道は自

慢だし、大抵の事は出来るがどうだ琴は引けないか」

娘「れ父さん、大丈夫引かせよう」

父「どうしてだい」

娘「でも昔から「精神一到何事か成らざらん」と申しますもの」

永雨が晴れたので乾きさうとして傘を見たら蝸牛が二つ

御馳走ですよと笑ひながら妹が置いて去つた紙包を開いたら柏餅が三つ

庭の植木に水を注ぎ終つて空を仰いだら星が二つ

「兄さん分けよう」といひながら弟が袂から出すのを見れば青梅が四つ

「お前いくつ」と聞いたら紅葉のやうな手を開いて「五つ」………(たれ長)

續小哲學 をはり



附 録

五 厘 銅 貨

紅 れ ん 作

紅蓮の友人に、今場榮頼といふのがあります、一行半ばかりの肩書
で以て、官報へ度々顔を出すんですが、昔は一介の書生ツポでした、
書生ツポ中でも、デレ助連といひまして、ならず者、ごろつき、そ
んな方面へ近い人なので、僕なども、途中で出會つたら二十銭宅へ
來られちやア五十銭位はきつとねだられる、そうさ今まで彼是半年
位の間銀貨を一合升に五六盃は取られました、それが何しろ、

シルクハットにモーニングコートで以て、ゴムの半靴足と親むといふ方なんですから、妙ですとらしてそんなに變化したろう、それに面白き話があります

今場は、みずく刈る信濃の國の産で、父は百姓とか母は亡いとやら何しろ貧乏なのを、父は心掛の善い人でしたからこれからは學問でなくてははいけないといふ所へ目が附きました親に似た子で、今場も感心に勉強する寺子屋では何時も試験に一番で以て卒業する、即ち百里の旅を思ひ立ちて東京へ参りました

今は東京、其頃は未だ江戸です、三四十年位前の事ですから、學校といひましても學校らしいものはありません、洋行歸りの醫師で、

夜間教へてくれる人の所へ習ひに行きました、初めての年は、それは、豆洋燈の火が小豆にあるほど、一生懸命に勉強しましたから、善過ぎるほど、目ごましい進歩して、田舎者なんて馬鹿扱にしたり、連中を、あつと驚かせた、それがつい強慢となり剛慢が不勉強となり不勉強が墮落となりまして、次の年の試験には、辛くも及第したが早二三の悪友はあつた、第三年目には、既に後をくらまして寄宿舍に居あかつた、全く放蕩兒に成つちまつたのである。それでも金はないし、國元へ相當な手紙を遣らねばならず、友達との交際は尙更したい

或日のこと金借りに行く所も、もう無いといつて、木賃宿にばかり、うづくまッてるがさびしいから、ブラリと的もなく外へ出ました、

何所へ行つても善い事はなし段々遅くなつて、夜の十一時頃日本橋の上を通りかゝりますと誰か後から呼ぶ者がある、はてなと思つてふり向いて見ると、それは金かしてくれそうな思ひもよらざりし舊友、ではなくツて、四五日来同じ木ちん宿でしばし顔合はする八卦置き即ち賣卜者なので「ヤア君どうです、拙者はこれから歸らうとする所です、一緒に行きませんか」兩耳へ紙よりを以てかけた大きな眼鏡の古いのが、テラ／＼と光る洋燈頭に能く似合ツて、垢ついた着物は十徳でなくて法衣の如く羽織の如く、東コートに似たり二重マントに似たりこれはしたりと思はず吹き出される様な姿である

今場もこれには閉口した、そしてつくづく思ふて見ると、殆んど乞

食の様ささもしい姿の者に「ヤア君！」など、友達にされ、て居るとはつゆ知らず、國では八張り手紙の通り枚々を汲々と勉強してると思ふてか、と一時に胸がふさがツて目がうるんで来て、何んだか悲しく成つて來るとき

「君！、今夜はうすら寒いから歸つてから二人で一杯やらうではな
いか！我輩は本日の収入額の二分の一大枚十一錢五厘をはづむに
依て君も囊底を叩き給へ、呑まう／＼何んだか本日イヤ今夜は呑
むべき日らしいではないか、エ君！」

今場が多少うつむき勝ちの憔悴顔をのぞき込むで云ひかける今場も
獨りでくよく／＼物思ひしても何にもならねば馬鹿げて、他が誘ふも
の、エ、まうよと生返事をして引張られて行く。とある小路の横

町へ這入りました

今場も久しぶりで一盃やつて見ると、又酒の味は特別で微酔ひの心地は何とも云へない注文通囊底の七錢五厘叩き出してしまつて後は零でも苦にならぬ、實に「酒のめばいつも心かはる」と借金取もうぐひすの聲」と二人歌ひ合はして其所を出た、折りしも空くまなき十六夜ばかりの月かげは物すごさままでに光り美はしく二人をてらしたのである、賣下先生今場の顔をつくく見て

「ヤア君、君は出世の相があるぞ、こいつはチャンチャラをかしいぞ我輩一つ名譽で見ると、道傍の石の上で笹竹を鳴らして、今場の顔と古びた本とを見くらべて見ることしばらく」や面白らゝゝあるくゝありくゝとしてあるがめでたかりける——と

後事は義太夫の様な謠曲である、そして君は出世する、最前小酒屋で聞いて略履歴も悉く當る、君は出世の相があるのみか卦も出す最初に神に助けられるとある、明日にでもれ宮へ参つたが善からうと、酒くさき息を吹きかけ乍らペラ〜とシヤベリ立てる、今場は無言で居る、月は二人をてらしける

* * * * *
家へ歸て床へもぐり込んでも今場は少しも眠られぬ、水半分の安酒はとくに酔さめて、たゞ何とはおしに眠られない娑婆の事を思ふと、かすみがくれに故郷の山を望む様に、うすら寒くもなつて來て物かなしい、出世が出来るのであろうかと思ふと馬鹿くしら、一生れ酒を女房にと思ふとあんまり悪いところもちもせない、而し兎

に角兼て思はぬでもなかつたのだから、今夜ねむられぬのを幸ひ遠くもあらず一寸行つて來うとムツクリ起きてブラリ出ました

近く二丁ばかり河上に八幡宮があつた、今頃はうこへ行つたのである、行つて神のみ前にひざまづきて拜まうとするときふと思ひ出した、只今石橋を渡りて鳥居をくぐるときたしかに坊様らしいのが何とか云つたつけ？七夜通へ？と云ふたあれは夢ではないぞ？さては此宮は靈驗あらたなりと兼てきいてゐたには間違ひツこない、かたどけあしと更に手を合してねがむ『あはれ大み神、浮世の事はすべて思ひ切りました、せめて人らしき姿して國へ歸りたいのです、願くは五十圓の錢を得させたまへ——』と渴仰して居ます、苦しい時の神頼み、貧すれば鈍する、此頃の今頃は普通式がないのであつ

た

然し感心に毎夜行きました二夜三夜、四五六、七夜目の夜はいたく更けて夜明けの明星が出る頃であつた、ねむるともなくふらふらと眠つた、とればるげに思ひあえず、目の前へ、衣冠正しき一柱の神おらはれ給ふ、はつとかしこみ頭を下げるとき、『五厘の銅貨一つを携へて江戸八百八街を廻り見よ』と、幽乍ら聞き取れた、と思ふすぐ社頭の松風高く聞えて、幻だにあらねば天地極めて静で、東の空はやたはかれ時ともなるらしい
はて？今のは——今のは——正しく神のみつけである！今頃は欣喜雀躍して、鎮守の森を出た、うして直ちに、五厘の銅貨を懐にして八百八街を廻つたのである、うれは必ず途中でさる包を拾ふか、さ

もなくば可然慈善家にめぐまるゝのであろう、と思ふて腰懸當下げ
て、兩國の橋詰れで、芝居の隣にれつこちが在つたさうですけれ
ども、ろんな所へも立ちよらず、今場は正直に八百八街を三日間
廻りました廻て参りましたが別に何事もありませんでした、もしや
わが知らぬ間に人が、と思ふて袂を見れど何も有りません、懐を
見れど何も有りません、只在るは五厘錢一つである、神様はいゝ加
減に人を馬鹿にしてると腹立たしく思ふた、而し翻て思ふて見ると
必ずしも其時とは限られぬ三日の後かもしれない、五ヶ月の後かもし
れぬ、今のはその種だけを蒔いて来たのかもしれない、先づ今夜は
復命しやうと、心を静めて、更にな宮へ参りました、すると勢れて
フラ〜と眠る、と先日のお姿明かにれがまされて

「汝は愚なる人よ五厘の銅貨は元の通り懐にあるを、見よ五厘の
銅貨さへ他人は滅多に捨てぬ、況んや五十圓の金は唐天竺へ廻つ
ても何處のはてにも落ちては居ぬ。悟れ汝、金がほしくば、それ
だけを働け、夜更けて社頭に迄来らずとも、働かば他人は自から
相當の金を汝に贈るぞよ」
聞くと、今場は犬猫の様に膝折り伏て、頭は地に附て在つた、不圖
夢より覺めると、犬の遠吠が、すかに聞えて、夜風の寒いのが一し
は身にしみ通る、今場は静に頭を上げて、袴を正して、臂を高く廣
げて、謹嚴に兩三回叩頭をした
諸君よ今場は今から善人である
ろれから三年の後、今場は文部省の試験に及第して、中學校の教師

と成つた、それは官報に其名を出された始で在つた、それから漸々
に出世して、今はある重大なる役目を仰せ附けられて居る

(をばり)

明治三十四年七月十九日印刷

定價金八錢

明治三十四年七月廿二日發行

郵税金二錢



編輯兼
發行者

上村才六

東京市麹町區三番町五十三番地

印刷者

岡田鍊一

東京市京橋區南紺屋町廿四番地

印刷所

岡田印刷所

東京市京橋區南紺屋町廿四番地

發行所

東京市麴町區
三番町五十二番地

鳴阜書院

鳴阜書院出版圖書目錄

荒木鷲泉 今井綠泉合著

社會と文學

全一冊 定價 金拾五錢

流暢の筆明快の文社會の上下を通觀し文學の表裏を洞察し富豪を叱咤し貧弱を慰撫し汽車室の平等を説き寄席の改良を論し其妙宛かも麻姑を情ふて癢處を搔くの想あり

罵郎 著

捫 虱 錄

全一冊 定價 金拾五錢

肥馬に鞭ち輕裘を著くるにあらすんは天下の事得て議すへからさるか曰否罵郎久しく事に操觚に従ふ情熱して大罵り眼冷かにして頻りに嘲る立意警拔連筆縱橫風雲を驅り龍蛇を走らす要するに曠々者流と其撰を異にするものあり而も其古英雄を以て任するの當と當らざるは讀者之を卷中に問へ

武田原水著

各現代の人物

全一冊 定價金貳拾錢

一隻の眼能く世局の趨勢を看取し一管の筆正に英傑の心事を描出す
兔起鶻落の勢あり龍嘯虎鬪の概あり案を拍て覺へす快哉を呼はしむ
當世に志を抱く之士豈に一讀せずして己むへけんや
泉物外著

列傳 禪學小史

全一冊 定價金拾五錢

禪を説き禪の種類を別ち系統と分派とを明かにし進んで釋迦牟尼よ
り北宗神秀に至るまで六十餘家の列傳を叙し以て頓悟の機會を指示
せり眞に初學者參禪の寶筏なり
中山古洞撰 上村賣劍題詞 伊藤阿山著

政治小説 東洋の波瀾

全一冊 定價金貳拾五錢

男子が君國に報ゆるの心事を寫して海天萬里羈旅の辛酸に及び女兒
が良人を思ふの情緒を描いて燈火半宵孤閣の幽寂に到る艶麗の筆沈

痛の想人をして喜はしめ人をして怒らしめ又人をして笑ひ且つ悲ま
しむるもの此書あり而も其些子兒だも卑猥に涉らざるは社會上下の
家庭に入りて何人の伴侶たるをも得へし
杏園 山田正隆著

立身要訣 勤學捷徑

全一冊 正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

口繪 當代の名士十八名及び世界の名勝十四景
を美麗なる十六頁の色摺寫眞版とせり
題して勤學捷徑といふ如何に就學者の必携必讀珍書たるかを見よ是
れ其記載する所悉く學生勤學の要訣にして讀書作文作詩作歌の法は
素より和文漢文英文に至るまで其譯法を親切明瞭に解釋し學生をし
て容易に就學の方針と成業の順序とを知らしむ獨り就學者の至寶た
るのみならず又教育授業上の參考に資する所尠なからず

作文秘訣

全一冊 定價金拾五錢
郵稅金四錢

作文秘訣は、現今の子弟をして、作文の方針を知らしめんが爲に著は
す所の秘訣書にして、紛々たる今日の文體中、少年の撰び取るべき文
體を論定し、其他、作文の方法心得等を卅餘章に分説したる珍書なり
三

●附録 〔填字、用語集、添削、對句、假字の本字、文學瑣談、填字の答、戯に學徒に示す〕 四

百人一首通解

冊一全 定價金拾五錢 郵税金四錢

百人一首は中納言藤原定家卿の選べるものにて、上は尊き雲の上人より、下は賤しき海人の子に至るまで誰れ知らざるものなく、幾百年の久しき世間賞翫して措かず、然れども未だ其歌の真味を知るものは極めて稀なるが如し、當院茲に文學士渡邊又次郎氏外斯道の達人に計りて、本書を發行せり、本書は文字平易にして婦女幼童にも了解するを得べく、殊に作歌せんとする者にありては、無上の好資料たるべし、又各歌の初めに一々詠者の略傳を附したれば、大に便利あり

記事文範

冊一全 定價金十五錢 郵税金四錢

本書は少年の記事文を作らんとする者のために、手本を示すものなり。文題は、修身歴史山河遊覽等に分ち、作者は古來屈指の文章家に探り、各題ともに、批評を加へ、標記には、作者の注意すべき件々を示し、市上に流布する赤本類とは、天地黑白の差違あるを確信す。

形容語及故事

冊一全 定價金十五錢 郵税金四錢

●口繪 小堀鞠音氏筆 貝原益軒遊山の圖
名は形容語と故事となれども、實は、和漢美文の精粹を集め、俗諺と漢語に故事解釋出典を示し、昆山の玉、桂林の枝の、燦然鬱然として、雙美を争ふ如し文を作る者一本を坐右に、花秋月の妍、崇山邃谷の端の飛動すること、春蠶の絲を吐く若く、春花秋月の妍、崇山邃谷の幽、口心のまゝならん。殊にイロハに分類し、索引に便したれば、物を囊中に探るよりも易かるべし

書牘文範

冊一全 定價金拾五錢 郵税金四錢

●口繪 太田蜀山人の圖 中村不折氏筆
日常親族朋友の間に吉凶相吊慶し、風月相賞玩し、消息を通じ、質問照會するより、商業上の取引注文等、書牘文は直接に益を爲すものなし。されば、人たるもの、他の美文に通せざるも、書牘文に通せざるべからざる必要あり。これ本編の出る主眼なり。本編は、世の複雑となり、百事繁忙を極むる社會にありて、吾人の執るべき書牘文の方針を論究せるものにして、組織上文體上。大に從來の書牘文と其軌を

異にし、學理と實際上より新機軸を出したれば、如何なる初學の人に
も了解すべく、實例は適切にして、附録の書牘文談の如きは、皆少年
の讀みて洪益ある文字なり。

現廿八大家文鈔

全壹冊 定價金十五錢
郵税金四錢

◎口繪 楠南溪不知火を見る圖 尾竹々坡筆
此書は現今文壇に於て鏘々たる二十八大家の金篇玉什を撰び少年作
者のために文章の軌範を示し併せて明治の文華を發揚するの微意に
出たるものにして其光彩の燦然たる恰も春郊の花、秋夜の月に對
するか如く讀者を益する蓋妙なからざるへし

遊記文範

全一冊 定價金拾五錢
郵税金四錢

山に行き川に遊び、神社に參し佛閣に養し、或は蕭條たる古戰場を訪
ひ、或は渺茫たる波濤を航す。文無くして可ならんや、本書は實に其
軌範を示す者にして、欄を分ちて觀花、名勝古跡、驛路村郊、社寺、温
泉、山岳、巖石、溪谷、瀑布、河川、湖畔、海岸の、十一となし、古今名家
の妙文佳作五十有餘を掲げ以て其則る可を知らしむ。一度之を繙け
ば、身は雲影水聲嵐色波光中の人と爲り、常に文を作る上に於て益を

得るのみならず、坐ながらにして天下の名區勝地に遊ぶの想あらん

十一月ヶ月文範

上下二冊 定價各金拾五錢
上卷三版印刷中

滔々たる天下の學生、誇張華飾の虛文を作る惡風に溺れて、實用を忘
る。豈普通教育の本旨ならんや。この弊を矯正せんとして、先づ作文
の大方針を示すもの、即ち此編なり。座右眼前の事物を取りて、悉
く作文の料となし、高きに登るに卑き自らする楷梯となす。若し夫
れこれ等の諸題に熟する時は、天下の森羅萬象一として文章を成さ
ざるなく修辭達意はたゞ心のまゝならん

算數奇觀

全一冊 插圖數十枚
定價金拾五錢
郵税金四錢

本書は凡有りて其奇々妙々なる算數學に關したる遊戯的奇觀數百を網羅
せるものにて其奇々妙々なるは一々之を言ひ盡すべからず年齡當て
の法、算引き法、方陣、圓陣、歳ち紙、賽數倍増し、時計、寒暖計、
西洋日本尺度、乗除速算法、七數九數の奇なる性質、など、高尙な
るは代數の域に入り、卑きは四則に及ぶまで、一題は一題より奇な
り、若し一冊を購ひて、學友と遊戯する媒となさば、しらすしらす
算數の妙趣を語り得べし、細目録はこゝに略す

少年世界記者 巖谷連山人序
 少年國民記者 竹内紅蓮編
 尾竹國觀 尾竹竹坡畫 口繪

には「白鳥園東海」を古人も歌へりし
 富岳の絶頂を始め幾度見ても見まかぬ天
 下の奇勝八頁を以てし附録には滑稽短篇
 小説「讀枝の手洗ひ鬼」を以てしたり

小哲學 一名笑林

此書は、無邪氣にして面白をかしく、輕妙にして罪なき滑稽寸話を多く集めたり、第一、編者が記憶に止まりて、今日までも忘れ得ざりしもの。第二、此書を編せんが爲め新に師友を訪ふて聞き得たりしもの。第三、少國民の笑林中より最も妙味あるものを拔萃したるもの。此三者すべて六百有餘編ありき、其中の精の精、萃の萃をぬきて僅に十分の一を得たり、故に叩て金玉鏘々響あるべく眞のエーモルとして文學上の價値も決して少からざるべきを想ふ。

新考物

愉快なる遊の内に知らず識らず益を得るは考物なり本書は全紙數八十七頁にして、天文、地理、歴史、動物、植物、人事、支體衣食器具、雜門等の各種に分ちて一々答を出し附録には諸皇族の芳名其他十數種を添えたり此種の書は當院發刊の者の外求めて他にあらざる所也

正續 定價各金五錢
 二冊 郵稅金貳錢
 續編印刷中

雜誌の部

少年國民

少年雜誌界の大王と稱せらるる、少國民は今後一層意を紙面に注ぎ、着々改善の途を講し、益々少年諸君の爲めに盡瘁せんことを期す、夫の無意無主義なる營利的雜誌と同視すること勿れ、本誌は毎號添ふるに精巧なる寫眞版の口繪數葉を以てし、記事には、歴史あり文學あり、理科あり、化學あり、修身あり、冒險談あり、其他美術あり、教育あり、一として少年に裨益を與へざるはなし、

毎月二回 一日十五
 日發行 定價 一冊八錢十二冊
 一冊十錢二十四冊
 一冊七錢五錢
 郵稅一冊一錢宛

新詩綜

◎新詩綜は明治の詩壇上如何に好評を博し如何に尊重せられしか今更贅するの要ありし
 編次の概要を擧ぐれば臺閣江湖諸名流の雄篇傑作は詩壇の泰斗たる森槐南先生が妍麗雋妙の筆を以て剴切なる評隲を付し且つ各其の小

◎毎月一回 定價金拾五錢
 六部前金八拾五錢十二部前金
 壹圓七拾錢 ◎郵稅五厘

傳逸事を綴られたれば諸家の詩品由て定まるべく亦昭代の詩話として之を讀むべし雜録は寧齋野口先生鴈所北條先生裳川岩溪先生天隨久保先生賣劍上村先生等が筆になるもの皆後進を指導誘掖するに足るべく滄海遺珠の一欄は大方文雅の寄稿中より其秀逸なるものを擇み且つ懇切なる評正を加たれば何れも異彩を放たざるなし附録杜詩諺解の如きは槐南先生が卓拔なる詩眼を以て平易に杜詩の蓋奥を發揮せられ一讀の下親しく講筵に侍するの思あり

文界の指針、青年の機關

新 思 潮

毎月五日發行 ○定價壹部金
八錢郵稅壹錢壹分
共金六錢半ケ年分五十一錢

『新思潮』は、高きうぶ聲を以て、新たに生れ出づべき、青年の好文學雜誌なり『新思潮』は、天下の秀才を一堂に集め、自由を貴び公平を重んずる一大共和國あり『新思潮』は、最、投稿を歓迎す、これを評撰すべく、數人の親切なる記者をもてり『新思潮』は、其前三分の一に於て、諸大家が筆に成る『和歌』『俳句』『漢詩』『英詩』等其他の有益なる評釋を掲載すると同時に諸名流の美文韻文等を紹介す●『新思潮』は、其後三分の二を幾多青年諸君の投書の爲に費し且數人の記者が叮嚀なる評正を試むべし

